NPO法人加治川ネット21情報紙

水辺のひろば

No.18
2013年10月 1日発行

五十公野公園内の生き物を学ぶ

自然から命を学ぶ イオン・チアーズクラブの水辺学習

7月27日、下越地区内イオン4店舗のイオン・チアーズクラブ夏恒例の「水辺の大楽校」が開催され、今年も加治川ネットがサポートしました。参加したのはクラブの64名の子供たちです。会場はいつもの滝谷森林公園のコンデションが悪かったため、五十公野公園に変更しました。

毎年、さまざまのテーマを設定するチアーズクラブの活動ですが、今年のテーマは「エネルギーについて」。当日のメニューは、発電のしくみの講義と当会の会員が用意した手作りの羽根車を使った水力発電実験、そして、生き物調査など。

子供たちはスタッフの指導の下、竹の水鉄砲を作った後、それを使って、羽根車に放水します。一人ではなかなか回転しません。3人がかりで放水し、水が上手く当たると羽根車が回転します。電気を起こすことも簡単ではないことの体験学習です。

午後は菖蒲園内の水路で生き物探し。スナヤツメ、ヤゴ、シマドジョウ、メダカ、オタマジャクシ等の生き物が見つかり、子どもたちはおっかなびっくり触っていました。

寄稿 殿様街道てくてく旅 ⑪

白河から奥羽街道を行く 2

さて、前回に引き続き奥州街道を行く旅は、栃木県大田原佐久山の小さな郵便局前からのスタート。朝4時半に新発田を発った時は雨だったが、車を走らす4時間近い間に次第に小降りになり、かすかに見覚えのある佐久山に着いた時にはすっかり晴れ上がっていた。

峠も山道も無い比較的なだらかな関東平野の野辺の道を、雨上がりの初夏の景色を楽しみつつ歩く。所々に黄金色に実った麦畑や、良く手入れされた庭先の花々、道祖神、そして喜連川（きつれがわ）では、蔵の2階の窓の扉が、竜や雲や花などの彫り物に鮮やかに彩色を施した物があちらこちらに見られ、お上りさんよろしくキョロキョロしつつ歩く。

喜連川の小さな町の小さな和菓子屋さんの店頭に「護美錦」の看板。なぜゴミが錦なのかと好奇心にかられ入ってみる。聞けば護美は「ゴビ」と読み、江戸時代の喜連川第8代藩主が肥後藩から養子に入った際に持って来た「サツキ」の名によるものだそうな。上品な甘さで、こういう発見も歩く旅ならではのこと。

喜連川も氏家も門構えが立派で道路からの奥行きも深く敷地も広く、積み重ねられた街道筋としての繁栄と重みが感じられる。地名からも栄えた歴史が偲ばれるのに、かの平成の大合併でつけられた市の名前が「さくら」!!
唖然とし、怒りさえ感じる。

かくして、怒ったり驚いたり、喜んだり笑ったりしながら歩いた距離35km!!

江戸をめざし、更なる旅へ。(K.K)

（次号へ続く）

こんな場所発見

新城（岩谷城）の麓 三光焼と白土洞窟

新発田市の二王子岳の麓、上三光に竹俣藩の山城跡「新城」がありますが、そこに行く途中に深谷という場所があります。

大正の頃に「三光焼」と呼ばれる焼物がありましたが、ここはその陶土を採集した場所と窯場跡で、中世山城・竹俣新城（岩谷城）から西に伸びる尾根の末端付近、段丘上の平坦地にあります。

この辺りは藍色の磁器や、窯道具のハマの細かい破片が確認されているそうです。カオリンと呼ばれる白土・白陶土も幾つか散乱しています。以前窯場跡は山のような盛土の場所にあったそうですが、今はその面影はありません。

冷気の吹き出す洞窟

その場所から、竹俣新城に向かい、堤の脇の林道に入り、歩いて10分程行くと、道の脇の藪の中にポッカリ開いた坑口が見えます。内部は大きな空間でいくつもに分かれ、中には地下水がたまっていて、水はとても澄んでいて綺麗です。水深があり、長靴に水が入るくらいの深さで、崩落の危険もあるので内部には入れませんが、夏は冷気が吹き出し、寒いくらいです。

ここの土中には磁器の原料のカオリンが眠っており、窯場に落ちていたものとも似ているそうです。深谷の白土は、地元の三光焼はじめ、新発田焼（新発田の保科謙吉創始。別名「保科焼」ともいう）にも使われていたようで、県内でも有数の白土産地だったそうです。

今は雑木に囲まれひっそりとしていますが、この辺り一帯は、昭和30年代まで美しいヒメサユリの花が咲き乱れていました。

《編集後記》

全国で資源分別回収に目をつけ、集積場所に出された古紙を持ち去る事件が多発しているそうです。

持ち去り業者は、回収日を狙って時間を問わず、車を乗り付けて持って行ってしまうため、なかなか業者特定ができず、また、特定できたとしても廃棄目的で出された古紙は所有者が特定できないので、罪に問うのは難しいという問題もあります。

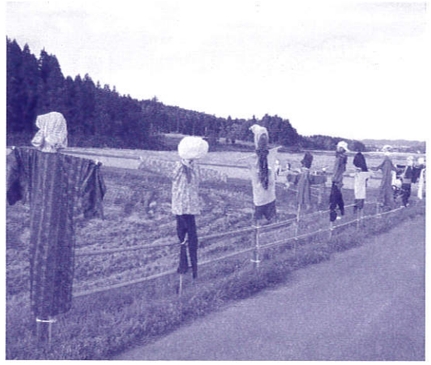
自治体によっては、回収委託業者の車両に「資源回収実施中」のステッカーを張って不審車両との差別化を図ったり、専用機器を装着した古新聞の束を集積場に置き、持ち去られた時にはGPSで追跡したり、警察OBを雇用して警戒に当たったり。一定の効果は上がっているようですが、その場所での持ち去りができないとなれば、当然別の地域でということが考えられます。決して他人ごとではありません。

NPO法人加治川ネット21の紹介

設　立	1996年11月。2003年5月法人化
活動目的	21世紀を生きる子どもたちによい環境（自然、伝統、文化）を残し、伝える。
主な活動	水と親しむ水辺の大楽校、生き物調査、小学校環境学習支援、川辺や町並み散策、手前みそ作り、シンポジウム開催
受賞歴	環境大臣表彰、新潟県環境賞、「日本の水をきれいにする会」会長表彰ほか
年会費	法人会員10,000円、個人会員2,000円

発行：NPO法人 加治川ネット21　事務局：新発田市諏訪町1-3-21 まちカフェ・りんく内　電話：090-8080-1349　メールアドレス：kjn21@ml.shibata.ne.jp

案山子づくりに初挑戦したよ 参加者レポートより


今年もユニークな案山子が

加治川ネットも共催する竹俣活性プロジェクトの農業体験が、今年も開催されています。

5月中旬の田植えから2か月が過ぎた7月21日、プロジェクトイベントの一つ「案山子づくり」が開催され、妻と孫を連れて初参加しました。

初めに、田植えした田んぼを見に行きました。5月に手植えしたときにはヒョロヒョロで、本当に育つのかと心配だった苗は、植えたときの数倍の株に成長しており一安心。実りの秋を体験できそうです。

次に、この田んぼに用水を供給しているため池の様子を調査。ため池は田んぼの上流の沢にあり、おいしい米を作るためには大切なものかもしれませんが、それより孫はため池の周辺に生えていた大きなキノコに興味津々。私も7月に直径20センチ位もあるキノコを見たのは初めて。調べると網茸の一種のようで食べられそうに思えましたが、キノコの季節ではないために持ち帰りを断念。後日、持ち帰って食べたという人から大変美味であったという話を聞いて、ちょっと後悔しました。

午後からはメインイベントの案山子づくりに挑戦しました。竹や藁を芯にして古着を使って作りますが、竹は滑りやすいし、手となる横の竹の固定や藁を芯として胴体をつくるのは予想以上に大変でした。しかし、事前に構想をまとめておいたおかげで、1時間ほどで満足のいく案山子ができました。

一緒に参加した他の人たちも、それぞれ工夫しながら思い思いの案山子を完成させていました。

9月の稲刈りの時には、畦道に並べてコンテストをするとのこと。さてどんな案山子がそろっているか。乞うご期待。(T・W)

小学校環境学習パネル展

新発田市、聖籠町、胎内市の小学校などの学習成果パネルを開催します。

とき　平成25年11月9日～17日
午前10時～午後10時
(最終日は午後5時)
ところ　イオンモール新発田　2階
主　催　NPO法人加治川ネット21

地域での生き物調査に講師やスタッフを派遣

当会の大切な活動の一つに生き物・環境調査があります。イバラトミヨの生息数調査のため、市内久保の水路などで年2回実施する調査、地域から依頼される住民対象の生き物調査、そして学校の授業としての学区内水路での環境学習など、その回数は年間約20回。そんな活動を紹介します。

佐々木地区

8月4日午前、佐々木地区古太田川の生き物調査が開催されました。古太田川では藻刈りや河川清掃のために水量が減るこの時期にあわせて毎年実施し、加治川ネットがスタッフを派遣しています。

じっとしていても汗が出る炎天下でしたが、地区青年部の皆さんの活動により、コイ、フナ、オイカワ、カマツカ、50センチを超える大きなコイも捕獲されました。

佐々木地区では平成16年に、当時の佐々木小学校の子どもたちが「ホタル舞う　夢の公園」の未来像を描いた大型パネルを制作。今、その公園実現化に向けた整備事業が始まっています。これからの佐々木地区の取り組みにも注目です。

川の維持のため藻刈りに励む地域の人

加治川地区

8月4日、佐々木地区の事業を終え、午後は加治川地区向中条での環境調査です。

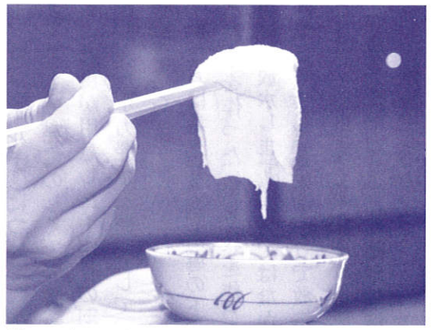
他地域での生き物調査はスタッフ派遣で、事業が終わればそこで役割は終了です。しかし、向中条での調査は、地区からの受託事業のため、指導者やスタッフ派遣のほかに、水質調査を含む環境調査の結果を報告書にして提出しています。

この調査によって環境の変化やその推移を見ることができます。向中条地区の生き物調査では例年、近年では珍しくなった「ナマズの稚魚」も捕獲されることから、その餌となる生き物が多い「大変良い水辺環境」が維持されているといえます。

また、向中条地区では魚類以外のタイコウチ、ミズカマキリ、トンボのヤゴ、貝類などの小さな水辺の生き物をたくさん見ることができます。これからも地域の皆様の努力によって豊かな農村環境が維持されていくことを願っています。

「何かいるかな」と網の中をのぞき込む親子

宝物みーつけた　京野菜・山の芋


驚くほどのこの粘り

米倉で栽培されている「山の芋」は京野菜の一種です。減反政策の一環として、他の地域との差別化で栽培したのが始まりとのこと。ヤマトイモ(ナガイモ)と同じものと思っている人も多いようですが、形状はごつごつした丸い芋。強い粘りがあります。

京野菜はその名の通り、京都で古くから食べられている野菜の総称で、日本料理に欠かせない食材となっています。京野菜は栽培が難しく、作るのに手間がかかりますが、伝統野菜だけあってとても美味しい野菜です。山の芋はつくね芋とも呼ばれ、関西の食文化にも欠かせない食材です。

しかし、山の芋を作り始めたころは、試行錯誤の連続で、収穫がほとんどできない年もあったそうです。あきらめず、粘り強く研究を続けた結果、山の芋は米倉地域の特産品に育ちました。栽培方法も米倉地区の風土に適していたようです。その粘りが強く独特の風味は人気が高く、地元の直売所でも品薄状態になることもあります。

山の芋の粘りと滑らかな食味は、一度食べたら病み付きになるそうです。11月中旬、加治川ネットの有志も参加して「新発田地域の在来作物を食べる会」と銘打ち、山の芋の他に海老芋や堀川ごぼうを使ったコース料理を、市内の割烹で堪能します。

くらしの方言 その11

ドS?な婆ちぁん

お婆ちゃんが孫娘と、カボチャの煮付けを作っています。

孫　「婆ちゃんカボチャ切れねぇ」
婆　「**どぇす**、婆ちゃんが切るっけ、包丁貸してみなせぇ」

孫　「婆ちゃん、この鍋重てぇ」
婆　「**どぇす**。役足らねぇなぁ」

孫　「婆ちゃん、カボチャ、もう煮えたろっかぁ」
婆　「**どぇす**、見てみっか。ほーれ、おめも食ぅでみろぉ」

孫　「熱っちぇ、舌やけどした。ドSだ婆ちゃん」
婆　「**どぇす**、水飲ましぇ!」

※どぇす
その時々で意味は変わります。「どれ」「ほれ」などのように使うことが多いです。

環境豆知識 Vol.16　40度の夏

今年の夏も各地で猛暑が続き、2007年に74年間最高気温を維持していた山形市の記録を熊谷市と多治見市が0.1度上回り、今年は四国四万十市で41.0度と記録更新になりました。1位になった市ではさっそく暑さを売りにした、まちおこしに乗り出したようです。

観測地の条件が必ずしも一定では無いので、記録の有効性については多少疑義のあるところですが、後日気象庁の職員が確認したとのことなのでこれはこれで公式記録となるようです。

気象の観測データについては、本来、観測地には芝生を植え地表面からの照り返しを抑えた「露場」という高さ1.25から2mの生活環境範囲内で行い、日本では1.5mとしています。今後も地球温暖化とともに、夏の猛暑は出現しやすくなるといわれており、日本の夏は亜熱帯地域と同じような環境に変化しつつあるようです。

NPO法人 加治川ネット21団体会員紹介(順不同)

(株)日園、曽根建(株)、(有)みずほ園芸、(株)アートグラフィック新潟、大進電業(株)、(有)ひかり電工、(株)ミトモ電設、ベック(有)、新発田ガス(株)、菊水酒造(株)、NPO法人 赤とんぼ、(株)馬場工務店、(株)小池組、(株)静岡グリーンサービス、(有)聖光園、エヌシーイー(株)、(株)花安 新発田斎場、(株)新潟グリーンテック、高橋基礎屋(有)、昭栄印刷(株)、若月建設(株)、川東土地改良区、豊浦郷土地改良区、大豊電気(株)